

印度古典修辭學史上に於けるバーマハ

大類 純

1. バートン・Bhāmaha の横顔

バラタ (Bharata: Nāṭyaśāstra) 以後、組織化された修辭理論、詩文學批評を古典梵文學に樹立した功績は先ずバーマハに歸せられねばならないが、彼の生涯、年代、環境、學派的立場等を覗うに足る資料として吾人に與えられているものは、彼の代表作と目され然も現存する唯一の著作たる「カーヴィヤ・アラシカーラ」Kāvya-lanikāra (以下 KA と省略す) のみである。その名の由來する所及び作品中から彼が極めて謙抑な人格の持主であつた事が知られ、又この名が彼の秀逸な才能の輝きに對して與えられた巷間の俗名であつたとも考え得る。事實彼は KA の卷末に彼が Rakṛti Gomin の子なる事を述べて居り (VI. 64)。(1) この點から彼の本名が氏族名 Gomin を冠して外にあつた事を豫想せしめる。又この Gomin を Gosvāmin との連關形に於て理解するべきであるとの説もあり、種々異論を含むが、父の名を廻つて彼の奉ずる宗教を詮議する手懸りとし交々推測が試みられた。

(1) M. T. Narasimha Lengar: JRS, 1905, pp. 535-45. 父の名 Rakṛti は Rāhula, Potala, Rāmita 等の如き著名な佛教徒名に類似し、且つ Gomin は佛弟子の一人の名たる事から推し、バーマハは佛教徒なりとする。

(2) K. B. Pathak: Ind. Ant., 1912, pp. 235 ff. Gomin は Gosvāmin との連絡は無く “pūjya” (尊敬すべき人) を意味し (Cāndravyākaraṇa 中 Sūtra 8 “gomin pūjya” を典據論證とす。IV. 2, 144; cf. gomān anyañ) Rakṛti が佛教徒であつた事を主張。尙 Candra は該文法書に於て “gomin” を最高敬稱なりとする。

(3) K. P. Trivedi: JRS, 1908, pp. 543 ff. Lengar の所説を徹底的に分析、批判し、駁論を展開、バーマハをバラモン教徒なりと主張。

又佛教徒たる事を證左する側の他の一つの論據として、KA の冒頭の敬辭たる “sarva sarvajña” を以て佛陀に捧げるものと解する點があるが、Kṛṣṇamechariā (Hist. of Cl. Skt. Lit., Madras, 1937) Kane (Int. to Sahityadarpaṇa, Bombay, 1923) 等多くの反駁に逢い、特に Kane の主張する所は次の四つに要約されるが、彼自身はバーマハの宗旨に關しては明確な結論を下してゐない。——(1) 作者の宗旨は作品内容から求めらるべきで、名前により左右さるべきではない。(2) 兩教徒が千年もの間共存していた時代に於ては、兩者の名前が混淆しても怪しむに足らず、況や十一世紀以前にヴィシシュヌのアヴァタール (權化) として佛陀が認められる

様になつては尙更の事である。この事に類似の現象は現代印度の印度教徒と回教徒の間にも屢々見られる現象である。(3) KA 中には佛陀、佛教説話等凡そ佛教的な事象の敘述は皆無い。(4) ① sāva は單に “sarvasmai hita” を意味するのみで、Amara に於いて佛陀の名稱として與えられては居ない。(2) sarvajña は佛陀と同様にシヴァ神の名稱でもある。

[N. B.] (1) cf. KA, VI. 53: sāva, sarvīya; Pāṇini, V. 1. 10. (2) Nāganātha Śastry (op. cit. 註 (1)): sāva (sarvebhyo hita, tr. Lover of All); sarvajña (tr. All-knowing). (3) Kṛṣṇanachariar (op. cit. p. 724): The epithets Sarva and Sarvajña have been used for various divine incarnation without limitation.

然らば KA 中に見出づ得る他の要素を集録する。(1) VI. 16, 17: 佛教徒の “apoha-vāda” (anyāpoha 論) を否定。(2) IV. 49, 50: ノーミ酒を飲んだ王の事蹟。(3) 用例中に多くのバラモン教諸神、二大敘事詩・ヘリーナ中の人物、事件等を取材。II. 41: Yadu-pravīra, Śaṅga; II. 55: Brahman 坐蓮天地創造物語; III. 5: Vidura, Kṛṣṇa (cf. Nag. Sastry: ibid. pp. 51~2, Note); III. 7: Karṇa, Partha, Śalya; III. 11: Rāma 森林遷徙; III. 24: Kusamāyudha (= Kāma), Śambhu (= Śiva); III. 32: Rāma 王 sala 樹; III. 36: Viṣṇu 王; III. 42: ノーミ酒の論; IV. 21: Śiva, Viṣṇu; IV. 28: Śiva, Pārvatī; V. 37: Sītā, Hanūman; V. 39: Bhīma, Rudhirāpāna; V. 41~43: Pratiṅgās (41. Dharmā, 42. Arthabhadhini, 43. Kāmabhadhini), Duryodhana, Yudhiṣṭhira, Bhīṣma (cf. Nag. Sastry: ibid. pp. 95~6, Notes);

V. 44: Rāma, Jāmadagni (= Parāśurāma) (cf. M. W. ms.: Skt.-Eng. Dic., p. 589); V. 59: Bharata, Dīlpa, Pūtravas, Pradyumna, Naravāhana.

此等の諸點はバーモンがバラモン教徒であつた事の論證を積極的に支持するに足るものではなく、印度民族乃至篤學博識の士に共通の膾炙たる材料を示すに過ぎぬであろうが、然も尙彼が佛教に對するより多くの知識と關心をバラモン教的要素に持つていた事を窺うに足るのである。

彼の生地は未詳であるが、その生涯の多くをカシュミール地方で過した事に今日の定説を見ている。その學問的態度に於て、極めて謙虛な人格を髣髴たらしめ、先人の業績の大略を摘要し、アランカ 1 ラを列擧するに當つては餘人の各種作品に檢討を加えて篤實な準備に人間側面の一端を示している。

II KA の構成及び論題

KA は十世紀餘の久しきに亘つて吾人の視界から遮斷されていたが、Divedi がそのテクストの部分のみを公刊して以來(註(1))、その聲價は頓ちに昂まり、古典修辭學史上への地位を確立するに到つた。然し乍ら未だ完全な MS を得るに到らず、決定的原典批判を経た Edn. の公刊を見るに及んでいない。

その構成は六章 (Pariccheda) 四五百頌句から成立、韻律は概ね śloka (各章の最終句及び引用の詩節を除く)、取扱う五大主題の各々を命ぜられる頌句數は大同である。

第一主題 kāvyasāra (詩の形態)	: 60
第二主題 alankāra (修辭技法)	: 160
第三主題 doṣa (詩的缺陷)	: 50

第四主題 nyāya (論理方式) : 70

第五主題 śabdaśuddhi (措辭精練) : 60

6 Paricheada's 400 verses⁽¹⁰⁾

本書の範圍 Paric. I : kāvyāśārīra's (結合された語と意味の關係) ; (1) 詩作の目的・效果、詩人の資質 ; (2) kāvya の定義 ; (3) kāvya の分類, (a) gadya, padya, (b) samikṛta, prakṛta, apabhraṁśa (以上、表現上より) ; (c) vṛttadevādicaritaśāstri (事實), utpādyaavastu (虛構), kalāśraya (技術), śāstrāśraya (科學), (d) saṅgabandha (詩文學の典型的構成), abhinayārtha (戲曲), ākhyāyikā (傳記), kathā (物語), anubuddha (分離語文) (以上、内容上より) ; (e) (d) を定義 ; (4) vaidarha, gaṇḍa 兩文體 ; (5) 作詩上の取遣 (neyārtha, kliṣṭa 等). Paric. II, III : alamīkāra's ; (1) 3 gṛha's としての madhurya, prasāda, oja ; (2) śabdālanīkāra, (a) anuprāsa (grānyānanuprāsa, lāṭhyānanuprāsa), (b) yamaka (5 種類) ; (3) arthālanīkāra : rūpaka (2 種類), dīpaka (3 種類), upamā (7 doṣa's と共に詳述, II. 29~65), prativastūpanā (前者の變形として), ākṣepa (2 種類), arthāntara-nyāsa, vyatireka, vibhāvanā, samāśokti, atīśayokti, hetu, sūlīśma, leṣa, vārt(t)ā, yathāśānīkhyā, utprekṣa, svabhāvokti (疑問視して保留) (以上, Paric. II), preyaś, rasavaḥ, ūjāsvin, par-yāvokta, samāhīta, udācta (2 種類), śiṣṭa (3 種類), apahnuti, viśeṣokti, vīrodha, tulyayogitā, aprastutaprasānā, vyājastuti, nidaśanā, upamānūpaka, upameyopamā, sahokti, parivṛtti, sa-sandeha, ananvaya, utprekṣāvayava, saṁsiṣṭi, bhāvika, āśis⁽¹²⁾ (疑問視して保留) (以上, Paric. III). Paric. IV : 11 doṣa's ; (1)

vīrodhi (6 種に細分類) ; (2) heṇa (3 種に細分類). Paric. V : Nyāya (IV に繼ぐ doṣa に關する論解) ; 非論理的なるものとしての pramāṇa, pratijñā, hetu, drṣṭānta の定義及び變形を簡潔に説明. Paric. VI : śabdaśuddhi (特に語列の音解) ; sauśabha(ya) (文法的, 特に nominal and verbal terminations の適應性に關する措辭精練⁽¹¹⁾).

III KA 著作の目的

パーヤンは修辭學に關する理論的分析・論述を目的とするよりも、寧ろ詩作上の技法に於ける實用的教本として役立つ事を念頭として KA を著したものの如く、各種 alamīkāra's に對する批判研究を容易ならしめんが爲の啓蒙書たらしむ事に本來の意圖を藏しつつある。その推測を首肯するに足るものとして本文中に指摘し得るものが少なくない。

(1) 「この著は有徳諸賢へ教授する事を豫定して、有能な詩人達の見解を踏査し、更にカーヴィヤの多くの諸性格をおまねく考慮した後で編まれたものである」(卷本 VI. 64)。(2) 「玄派な詩を作る事 (sādhur-kāvya nibandhanam) ⁽¹³⁾ dhārma, artha, kāma, mokṣa 並に學術を探究する能力を産み、且つ又歡喜と名聲を伴ひ、その目的は」(I. 2)。(3) 詩人ならざる人々 (アラムカラ) シヤーンタの知識を辛辣な譬喩で非難し、(I. 3) その誤用と過信の不當性を戒める。(4) 「如何なる雄辯の才智も適正な作詩能力を缺けば、氣品なき富貴、月明なき暗夜に等しき」(I. 4)。(5) 詩作に心がける人々に對し、根本的知識の學習として、文法・韻律學・語の表裏に重の性質・語義・傳記類の梗概・巷間の習俗・論理學・藝術の準備を要請する。(I. 9)。(6) 引續き Paric. I の冒頭に於

て、詩の目的、詩人の資質等に就て上記の諸點に關聯して種々補足的に述べる。(7) 詩作に當り、入念な熟慮を重ねて魅力に富む適切至當な語句を配列する事の不可缺性は、恰も花冠を編むに際して、個々の花のもつ美と芳香の個性に従つて取捨選擇の別をわきまえ適材適所に配合するに相似たりとする (I. 59)。(8) Paric. VI に於て扱う措辭の精鍊嚴選は、懇切な實用的論述を含み、類書に例を見ぬ特色であり本書の壓巻と稱し得る。

四 バーマハ斷章

『蜜の如く滑らかに流れる「カーヴィヤーダルシャ」の文體からすれば、詩的才能の卓越性という榮譽はバーマハより遙かにダンディンの方に與えられるであらう。尤も、簡潔性、論理の尖銳、概念の明析という點に於てはバーマハの側に軍配が擧がるが。』とは、Kane (op. cit. p. xxii) によつて放たれた評言であるが、一應の核心を衝いた兩者の對比評價として認めつつも尙多くの再考すべき餘地が尠くない。兩者夫々の文體にもつ特色と長所には異論無いが、バーマハの作中隨所に顯著に躍動する豐麗な詩的才量を示す文例は枚擧に遑なく (e. g. I. 13, 51; II. 55, 83, 94; III. 21; VI. 1-3) 就中 VI. 1-3 に於て文法の基本的重要性を敘述するに當つての、大海の譬喩の描寫はカーヴィヤーの先驅者 (ādikavi) ヴァーナムニキのラーマヤナ (V. 57, 1-4) の同一趣向を髣髴たらしめ、精緻なる秀什として高く喧傳せらるべき光彩を放ち、一斑以て贅言を要せざるものである。唯バーマハにあつては前述せる如く、著述の主眼を詩作の實用的見地に豫定せる爲、奇想天外に及ぶサンスクリット特有の諧調の極致を驅使、網羅して文例を展開せんと意圖したダンディンの述作とは、志向の懸隔上より多大の相違を結果した事は

免れ難いものである。alanikara's の定義に對し、用例を以て例示せんとする敘述形式もその獨創的着想の功績はバーマハに歸せらるべく、Panhati (Kavyālanikara-sarasangraha of Udbhata, Inti. p. xxi; Notes, p. 6) は、ウドバタの修辭學史上の位置を推稱するに急なる餘り、「改良という事はアランカーラに關する想念にあつても亦進歩していた。バーマハの或る程度弛緩した敘述は、精密な科學的明確さによつて置き代へられた。……解明された論題を仕上げる方案として、それを實例によつて達成せんと試みた。」「實例が茲には引かれてゐる。何故なら定義の意味はその適應性が實例によつて説明されぬ限り、その適切な把握は困難であるから。」と迄、例解行使の功をウドバタの創意に歸している。先に論理性と明析を謳われしバーマハが、茲に弛緩した文體と目される皮肉の妙もさる事ながら、ウドバタこそは最も忠實にバーマハの衣鉢を繼承敷衍せる後繼者であり、その學風の基調は凡てバーマハに遡る事によつてのみ理解、闡明されねばならぬ。ウドバタの Kavyā. Sarasang. 中に、バーマハから直接に alanikara's の定義を借用し、同一の表現語句を繰り返す徹底性の多々、夥見される事を看過する事は許されなく (e. g. rasaavat, sasandeha, sahakti, apahnuti, utprekṣa, yathāsānikhyā, aprastutaprasānsā, paryāyokta, ākṣepa, vibhāvanā, vīrodha, bhāvika.)。

ウドバタが、散逸して傳わらぬバーマハへの註釋書 Bhāmanah-vivaraṇa を書いた事は諸書の傳うる所で、又ウドバタに限らずバーマハは Ānandavardhana, Abhinavagupta, Vāmana, Maṇḍana, Kāmadhenu, Nārāyaṇa 等の後代諸家から畏敬を以て引用を受け、その文體が平滑にして簡潔な研磨を経、修辭學上の典範と

印度古典修辭學上に於けるバーン (大類)

擬せられた事を物語る。⁽⁸³⁾

就中ヴァーヤナ (Kāvyaśālikārasūtravṛtti) は、バーマへの精通を暗合せしむるに足る同一乃至類似の詩句の反覆、登用が少なくなく、e. g. upamā, KA II. 30; Vām. IV. 2. 1 (cf. Bharata, XVI. 41); atisāyavān artha (效果發揚のため) (含著), KA II. 50; Vām. IV. 2. 20, 21; KA II. 46; Vām. IX. 2. 4; KA II. 27; Vām. V. 2. 38 (cf. Abhinavagupta: Locana, p. 40; Vaktroktijīvita; Jayanagaṇa: Bhāṭṭi, X. 21)。

更に Rāghavatta (Comm. on Śakuntalā) は KA を「無盡の寶庫; (ākara) 之讚美」⁽⁸⁴⁾ Vidyānātha (Pratāparudayaśobhūṣaṇa) 亦バーマへの對う古代の師表 (ācārya) と比すべき讚仰を捧げるに及んで、(pūrvebhyo bhāmahādibhyaḥ śādaravā vhiṭa aṇ⁽⁸⁵⁾ jaiṭh)。

前述せる如く、流麗巧緻なる大海の譬喩を以て開幕する Paric. IV は、文法・語法の解明 (vyākaraṇa) の根源的重要性を力説したものに外ならず、満々たる海洋、渦流、海底の岩床、遠洋、航行する船舶等の隱喩する所、凡ては「文法の大海」を踏破せざる限り「言語の寶玉」は到底掌中に收め難からん事を説得せるものである。續く VI. 4 へに於ては更に「文法は窮極に於て自己の文法體系を確立すべきを強調するに到つてゐる。然るにバーニニ文法の傳統への歸敬を以て同章を結ぶひる (VI. 63. b: śraddheyaṁ jagati mataṁ hi pāṇinīyaṁ)。

四 バーンに異聞

バーンハが韻律論を著した事を、Nārāyaṇa (註 (24))⁽⁸⁶⁾ Rāghavatta (op. cit.) が指摘し、その内容を現在詳かにし得ぬ事は遺憾であるが、Kṛṣṇamecharīa (op. cit., p. 730) は後者からの引用を示してこの兩者が同一人物であるならば該論は斯題に關する極めて豊富、大規模な論述であつたろうとの感懷を漏している。これに類する疑問として懸案されるものに Vararuci の文法書に註釋書を書いたと傳えられるバーマハが果して同一人であつたか否か、又バーンハが修辭學に關する更に完備した述作を後年著したのではあるまいかとの節がある。後者の疑問の由來する所は Rasikarsāyaṇa (cf. Catalogue of Skt. MSS in Oriental Library, Mysore, 303) 中に彼の名を冠する「詩論に含まれる凡ての主題に就ての七章に亘る入念な論述があるが爲である。特にバラタ (Nāṭyaśāstra) に就つての解説は出色であるが、この中 kārīkā 之 vṛtti の部分の間には年代的に一線が劃されねばならず、若し kārīkā の部分がバーンの筆になつたとし、vṛtti は Kāvyaṇaprakāśa, Bhāvaṇaprakāśa に言及して居り、且つ Mālatīmādhava を引用してゐる點から推し、十二世紀以後に匿名で執筆されたものと推察される。又 Bhātanaṇyaka も亦 Udbhaṭa の如く KA に對する註釋書を書いたのではあるまいかとの疑問が残されるが、何れも現在傳うる資料を以てしては俄かに解決し難い問題である。

1 K. P. Trivedi: Pratāparudayaśobhūṣaṇa (Bomb. Skt. & Pkt. Sers., No. LXV, 1909), Appendix (viii).

2 V. V. Naganatha Sastry: Sri Kavyaśālikāra by Sri Bha-maha, Tanjore, 1927.

3 √bhām (cl. 1, Ā, 終々々) > bhāma > bhāmin > bhāmaha (negative ha < √hā cl. 3, Ā; < √han cl. 2, P);

√bhā (cl. 2, P, 𑂔𑂗𑂢𑂰) > bhāna > bhāmaha (emphasis ha).

BBB を名乗るが印度教徒の篤信者である。

brahman (= Isvara) に對してもこの呼稱を附加する事がある。

ibid. pp. 105~6)°

(IV. 51. 原文省略)。

(大類)

のである」(V. 69. a. 原文省略)。バーマハの以上の言説

シャーストラ濫觴に就ては稿を改めて論じたい。

通算となる。

(KA, 本文卷末)

る事は注目に値する。

りとしている點は注目すべきである。

Paric. IV にて、語句・韻律に關する誤謬を本格的に扱ふ。

印度古典修辭學史に於けるバーマハ（大類）

- 14 *hetu*, *sūksma*, *leśa*, *vārtā* は厳密には *alanikāra* と同じ認めず、理由はそれ等の中では *vakrokṭi*（技術的作詩）の要素を含め（*svabhāvokṭi*, 自然的作詩）爲とする。以てバーマハが詩の本質を *vakrokṭi* に置いた観點を窺つて足る（cf. KA II. 363）。
- 15 前註四形及び他學者のよつ *alanikāra* として決定された *svabhāvokṭi*, *śāśis* の二形が言及されてゐる事は、バーマハ以前に組織化された修辭學者が既存し、バーマハはその發展途上にて KA を編んだ事が證され、重要な示唆を與える。
- 16 *Alanikāra* (Rhetoric) の各論として、この取扱ふは Daṇḍin (*Kāvya-darśa*) のよつとを證する。
- 17 e. g. *śiśupālavadha*, 1. 51.
- 18 *śrūtikaṣṭa* (語の不協和音) に關しては 1. 53 の「一度論す。VI に扱ふ教示は、單に語列の齋す不調音を避けるとの消極面ではなく、詩的效果の完璧を期するための積極的鞏固性を説くものである。
- Vanana* は *Kāvyaalanikārasūtravṛtti*, V. *śabdāsuddhi* (*adhiḥkaraṇa*) に於て、この主題を更に精密に説く。
- 19 v. 1.: *nīsevanam* (*Abhinavagupta*: *Kāvyaśloka-locana*) 「立派な詩を用うれば……が結果として齋される」「立派な詩で尊敬を拂ふ事は……」の意味なる。cf. *Sahityadarpaṇa* (NS Edn., p. 4 comm.)。
- 20 q. v. S. K. De: *Hist. of Skt. Poetics*. vol II. p. 49: ...the practical object of the school of Bhāmaha in general was more or less normative in character and did

not allow sufficient scope for Purely theoretic treatment, *ibid.*, p. 52:the original view of Skt Poetics was that it was more of less a mechanical discipline.

- 21 *Pratīharendurāja*: Comm. on *Kāvyaalanikārasārasaṅgraha*, p. 13; *Abhinavagupta*: *Locana*, pp. 10, 40, 159; *Hemacandra*: *Kāvyaalanikāracūdāmaṇi*, pp. 17, 110; *Ruyyaka*: *Alanikārasarvasva*, p. 183 "*bhāmahaḥāya udbhāṭa-lakṣaṇa*"; *Samudrabandha*: Comm. on *Alhikārasarvasva*, P. 89 "*kāvyaalanikāravivṛti*"; *Bhaṭṭa Gopāla*: Comm. on *Kāvyaaprakāśa*, Intr. "*udbhātana api namreṇa nāyakena upalīlitaḥ, hr̥dyo bhāma iva strīṇām alpārambho 'pi bhāmahaḥ. Pratīharendurāja* (950 年頃) の註釋書に、この主要性の片鱗を窺ふ事を得。
- 22 *Dhvanyāloka* の引用 (Bombay Edn., pp. 39, 207) が最初のものとされる。
- 23 *Vanīvilāsa* Edn.: *ケーパルナカ sutra*, *vṛtti* の定義及びケーパル作の體裁 (KA 中では缺) を總論の *verse* (詩論上の主題に關する) を引用。Benares Edn.: cf. De, p. 57。
- 24 Comm. on *Vitaratnākara*, pp. 5~6: *ケーパルナカ*の長引用、且つバーマハで韻律論の著作のあつた事を指摘。
- 25 *Kṛṣṇamachariar* (op. cit., pp. 730~1) は、ケーパルの詩を示す好例として II. 92, 94, III. 46, V. 64, 68, VI. 47. を展示し、鑑賞を供す。
- 26 *ケーパル*の言及とそのエッセンスの總論は *Tivēdi* (op. cit., Intr., p. 22, footnote) 参照。